

# 領域「表現」の学びへ向かう音楽遊びの検討

—未就園児を対象としたワークショップをもとに—

安藤 恭子\*

## A Study on the Music Play toward Learning Area of “Expression”

—Based on a Workshop for Prekindergarten Children—

Kyoko ANDO

### 1. 緒言

平成29年に告示・改定（改訂）された『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の3法令は、平成30年4月1日より適用が始まった。今回の改定（改訂）に伴い、3法令における3歳以上の子どもを対象とした教育的機能はさらに整合性が図られ、育みたい資質・能力<sup>1)</sup>と共に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」とする）が新たに明示された<sup>2)</sup>。そして幼児教育の構造は、乳児保育や家庭での養育を経て、5領域を踏まえて行われる遊びを通した総合的な指導によって、育みたい資質・能力の実現に向かっていくこととなる。また、幼児教育修了時の具体的な姿として位置付けられた「10の姿」を共有することによって、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を目指す。そのため保育現場では、乳児期から幼児期、そして児童期という連続した発達の繋がりと共に幼児期以降の5領域に関する学びを視野に入れた子どもとの関わり、「10の姿」を念頭に置いた5領域の指導が求められる。

本研究の目的は、幼児教育の初期の段階にある3歳未満児、特に家庭で養育を受ける未就園児に焦点を当て、領域「表現」の学びに向かう展望を見出すことにある。未就園児を対象とした先行研究としては、鶴間ら（2009年）が未就園児の遊びの会における活動の姿から、遊びうたの選曲と環境づくりに関する考察を行っている<sup>3)</sup>、塩路ら（2018年）は幼稚園で実施されている未就園児の保育について、特に2歳児の保育内容や遊びの実態を調査し、その現状を明らかにしている<sup>4)</sup>。本研究において、未就園児の音楽遊びから領域「表現」の学びへ向かう見通しを立てることは、領域「表現」の指導法に対して新たな視点から示唆を得ることに繋がるであろう。

本研究では、音楽遊びのワークショップに参加した未就園児4名を対象として取り組みの様子を観察し、音楽遊びを通じて見られる表現やコミュニケーションについて、アンケート調査の回答結果と併せて分析を行った。本論では、領域「表現」における3つのねらい<sup>5)</sup>を拠り所として考察を行い、音楽遊びの可能性について検討すると共に領域「表現」の指導法の提案を目指すものとした。

---

\* 非常勤講師

## 2. 3歳未満児をめぐる現状

今回の改定(改訂)の大きな特徴の1つとして、『保育所保育指針』において示されている保育の内容が、乳児、1歳以上3歳未満児、3歳以上児と細分化されたことが挙げられる。この保育の内容の再編に伴い、乳児保育、1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容が新たに記載された。これは0～2歳児の保育所等利用率の上昇等を受けて、3歳未満児の保育の重要性が見直されているためである。

「保育所等関連状況取りまとめ(平成29年4月1日)」<sup>6)</sup>によると、平成29年度における低年齢児の保育所等利用児童の割合は0歳児が14.7%、1・2歳児が45.7%であり、3歳未満児(0～2歳)では35.1%となっている。保育所等利用児童の割合はいずれの年齢区分でも年々上昇傾向にあるものの<sup>7)</sup>、半数を上回るものではなく、平成29年度の統計上では低年齢児の約65%が未就園児であると考えられる。「認可外保育施設・幼稚園預かり保育の現状について」<sup>8)</sup>においても、推定未就園児の割合として0歳児が85.2%、1歳児が57.9%、2歳児が51.6%と報告されている。また、0歳児から2歳児までを合わせた該当年齢人口から算出した推定未就園児の割合は65.1%となり、先に述べた割合と一致する。

しかしその一方で、平成29年度の待機児童26,081人のうち、70%以上が1・2歳児であることが同取りまとめによって明らかとなっている<sup>9)</sup>。厚生労働省は「保育の受け皿の拡大」として、幼稚園における2歳児の受入れ拡大や預かり保育の推進を支援施策の1つとして盛り込んだ「子育て安心プラン」を平成29年6月に発表し、平成32年度末までの3年間で全国の待機児童を解消するとしている<sup>10)</sup>。この政策の実施によって、3歳未満児の保育所等利用率の上昇はますます進むことが予測され、家庭で養育を受ける未就園児との二分化が顕著になるのではないかと考えられる。いずれにしても、0～2歳児の保育の重要性に対する認識と共に、3歳未満児に対する社会的関心は今後より一層高まっていくであろう。

## 3. 研究方法

本研究で観察を行う『タビする音楽教室』<sup>11)</sup>は、以下の要領で実施した。著者は活動内容や環境構成、進行には一切関与せず、子どもの観察と記録のみを行っている。また、保護者にも子どもの取り組みの様子を観察いただき、実施後アンケートによって報告いただいた。著者と保護者の観察に加えて録画と録音による記録を行うことで、より客観的で詳細な観察結果となるように配慮した。

『タビする音楽教室』 一動物をテーマとして—  
 調査日時：平成30年5月31日(木) 10:00～11:00  
 調査会場：岡崎市図書館交流プラザ スタジオ (40㎡)  
 調査対象：未就園児4名(男児2名、女児2名)  
 指導者：高村衣美璃氏<sup>12)</sup>  
 観察者：調査対象となる子どもの保護者及び著者  
 記録方法：ビデオカメラによる録画、写真撮影、録音、記述



図1 お面をつけて動物に変身

ワークショップで行った活動と子どもの動きは表1のとおりである。会場設営として、前方に電子ピアノを配置し、活動④で使用するぶどう畑は後方に設置した。活動⑤で使用する池は可動式のものとし、子どもたちが会場全体を自由に大きく動き回ることができるように工夫している。子どもたちはお面をつけて動物に変身し（図1）、動物を題材とした音楽遊びに取り組んだ。

表1 活動と子どもの動き

活動	子どもの動き
① 準備体操	音楽に合わせて手足を動かす
② 「いぬのおまわりさん」を歌う	ピアノ伴奏に合わせて歌う
③ ヴァイオリンとの出会い	ヴァイオリンの音を聞き、楽器に触ってみる
④ 狩り：ぶどうを採る	ヴァイオリンの音が聞こえたらぶどうを採る
⑤ 狩り：魚を捕る	シンバルの音が聞こえたら魚を捕る
⑥ 動物の真似：鳴き声	動物の絵や写真を見て、鳴く真似をする
⑦ 動物の真似：動き	動物の絵や写真を見て、動く真似をする
⑧ 絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせ	即興演奏付きの絵本の読み聞かせを聞く

#### 4. アンケート調査

調査対象となる子どもの保護者には、ワークショップ実施前と実施後の2回、アンケート調査に協力いただいた。調査方法は質問紙法アンケートをメールで送付・回収する形を取っている。

##### (1) 事前アンケート

事前アンケートは、子どもの置かれる音楽的な環境や音楽経験について把握することを目的として行った。アンケートの内容は、子どもの基本的な情報に加え、自宅に所有している楽器や音楽経験の有無、ワークショップに参加した目的等を調査するものである。アンケートはワークショップ実施の約10日前に送付・回収した。回答結果を表2に示す。

表2 事前アンケートの回答結果

設問	A児	B児	C児	D児
① 年齢／性別	1歳6か月／女児	1歳9か月／男児	2歳5か月／女児	2歳8か月／男児
② 通園状況	なし	なし	週2日、託児所	なし
③ 楽器の所有	ピアノ、和太鼓	ピアノ、鈴、クラリネット	カスタネット	カスタネット、ギター、鈴
④ 音楽関係の習い事	なし	なし	なし	なし
⑤ ワークショップの参加経験	なし	なし	あり	あり
⑥ 保護者の音楽経験	あり	あり	あり	あり

⑦ 子どもが音楽に触れられるように、積極的に設けている機会	音楽フェスにつれていく家でピアノを弾きながら歌う	童謡のCDをかける	音楽をかけるテレビ番組を見せる	音楽をかける未就園児向けのリトミック等に参加する
⑧ ワークショップの参加にあたり、期待すること	本物の楽器に触れ、音楽の楽しさを実際に体験してほしい	お友達と一緒に音楽を楽しむ経験してほしい	たくさんの音楽で感情豊かになってくれたら嬉しい	色々なジャンルの音楽を知り、好きになってほしい

ワークショップに参加した子ども4名は1歳児が2名、2歳児が2名であり、いずれも未就園児である<sup>13)</sup>。4名とも音楽に関する習い事の経験はないが、C児とD児は既にリトミックのワークショップへの参加経験がある。そして、4名の自宅にはいくつかの楽器が所有されており、それは比較的に子どもが音を出しやすいものであることが分かった。さらに、4名の保護者は皆、習い事や部活動等の音楽経験があること、子どもが音楽に触れる機会を積極的に設けていることが明らかとなった。また今回のワークショップ参加には、「子どもに音楽的な経験をさせる」という保護者の明確な目的があることが設問⑧の自由記述によって示されている。

## (2) 実施後アンケート

表3 実施後アンケートの内容

① 『タビする音楽教室』で行った活動のうち、子どもが興味を持った活動、楽しんでいた活動はどれか【複数選択可】
② 『タビする音楽教室』で行った活動のうち、保護者の立場から見て、子どもに経験させたいと考える活動はどれか【複数選択可】
③ 帰宅後の子どもの言動に『タビする音楽教室』の影響と思われるようなものがあったか

実施後アンケートは、音楽遊びに取り組む子どもの姿を保護者に観察いただき、著者の観察結果と併せて考察の材料とするために行ったものである。アンケートの内容は表3のとおり、ワークショップで行った活動に関係するものだけでなく、帰宅後の子どもの言動についても調査するものとなっている。アンケートはワークショップ終了後に送付し、1週間後に回収した。設問①の回答結果を表4-1、設問②の回答結果を表4-2として示す。

設問①の回答結果からは、子どもの年齢や発達段階によって、興味を持って取り組んだ活動が異なることが分かる。1歳児であるA児とB児は②、③、⑧の活動を選択し

表4-1 子どもが興味を持った活動

活動	A児	B児	C児	D児
①準備体操				
②「いぬのおまわりさん」を歌う	○	○		
③ヴァイオリンとの出会い	○	○		○
④狩り：ぶどうを採る			○	○
⑤狩り：魚を捕る			○	○
⑥動物の真似：鳴き声			○	○
⑦動物の真似：動き	○		○	
⑧絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせ	○	○		○

ている。③と⑧の活動はD児も選んでいるが、②の活動は2歳児には選ばれていない。それに対して、2歳児のC児とD児は④、⑤、⑥の活動を揃って選択しているが、1歳児のA児とB児はいずれの活動も選択しないという結果となった。

設問②の回答結果は、活動に対する保護者の満足度が反映されたものである。8つの活動のうち、選択されたのは②、③、⑧の活動であった。この3つの活動は、②歌を歌う、③楽器の音を聞いたり楽器に触れたりする、⑧即興演奏付きの絵本の読み聞かせを聞く等、ワークショップで行った活動の中でも特に音楽的な要素の強いものである。事前アンケートの回答結果

表4-2 保護者が子どもに経験させたいと考える活動

活動	A児	B児	C児	D児
①準備体操				
②「いぬのおまわりさん」を歌う	○	○		○
③ヴァイオリンとの出会い	○	○		○
④狩り：ぶどうを採る				
⑤狩り：魚を捕る				
⑥動物の真似：鳴き声				
⑦動物の真似：動き				
⑧絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせ	○	○	○	○

(表2)からも明らかとなっているように、保護者は全員何らかの音楽経験があり、子どもに音楽的な経験をさせることを目的としてワークショップに参加している。実施後アンケートの最後に、気付いたことやリクエストを自由記述していただいたが、「もっとピアノに合わせて歌を歌ったり、リズム遊びをさせたりするとよいと思う」、「ピアノをもう少し聞かせてほしかった」という要望が寄せられた。このことから、保護者がより多くの音楽的な活動を期待していたことが分かる。

最後に、設問③に対する記述を示す。

ビデオ（「いぬのおまわりさん」を歌う部分）を見て踊った。（B児）  
 ライオンの鳴き真似をした。（D児）  
 フルートとピアノの演奏を聴いて踊り出した。それぞれの曲調に合わせて上手に乗っていた。（A児）

この回答からは、参加した4名のうち3名にワークショップの影響と思われるような言動が見られたことが分かる。B児とD児の動きは、ワークショップで行った②と⑥の活動を帰宅後再び行ったものであり、A児の動きは音楽を聞いて体を動かすという点で①の活動に結びつくものである。

## 5. ワークショップ

今回のワークショップは、1歳6か月から2歳8か月の未就園児4名が参加したが、面識のない指導者、他児やその保護者、会場の雰囲気に慣れることができず、音楽遊びにほとんど参加することができない子どももいたため、全員が揃って同じ活動に取り組むという形をとることが困難な場面が多くあった。そこで、3つの活動について抜粋し、事例として示すものとする。

## 事例1：「いぬのおまわりさん」を歌う

指導者のピアノ伴奏に合わせて「いぬのおまわりさん」を歌う。A児とC児は音楽に合わせて手を打ち合わせたり体を動かしたりした。B児とD児は母親の膝に座り、母親が音楽に合わせて左右に揺らす体の動きや手拍子を通じて音楽を体感した。

高村氏（以下、指導者とする）は「いぬのおまわりさん」を選曲した理由について、「歌が歌えなくても、〈にゃんにゃんにゃんやーん〉や〈わんわんわーん〉の歌詞から身近な動物である猫や犬をイメージさせることが目的であった」と述べている。「いぬのおまわりさん」は、歌わせることを目的とした場合、1・2歳児にとっては難易度が高い。しかし、「にゃんにゃん」は猫、「わんわん」は犬と連想させることを目的としているため、子どもたちが思い思いの姿勢で自由に動きながら約45秒間の歌を聞く様子を捉えることができた。ピアノによる前奏が始まると、子どもたちは全員、瞬時に体全体をピアノの方向に向けるという反応を見せている。A児は時折横にいる母親の様子を窺っていたが、B児、C児、D児の視線はピアノに向けられたまま、歌が終わるまでほとんど動くことがなかった。そして、A児とC児は手を打ち合わせたり踊ったりしながら、B児とD児はそれぞれ母親の膝に座って歌を聞いたが、他児に近寄ったり、他児の様子を目で追ったりという動きは見られなかった。

歌い終わった後、指導者が「何の動物が出てきたかわかる？」と質問したが、誰も反応しなかった。しかし、「にゃんにゃんってなに？」と再度問い掛けると、A児は「にゃー、にゃん」と何度も口にし、指導者が掲げた猫と犬の絵を指差して「わんわん」と言いながら走り寄った。C児も後に続いて絵に近寄り、「さっき、みたよ」と指導者に話す姿が見られた。

## 事例2：ヴァイオリンとの出会い

指導者がヴァイオリンの音を出して紹介した後、1人ずつヴァイオリンに触れていく。D児は弦を親指で弾いて何度か音を出した後、ボディをトントンと叩いた。A児は弦を指板に押し付けてなぞり、C児は弦を指でつまんで縦にスライドさせ、擦れたような音を出した。B児は自身の手でヴァイオリンに触れることはしなかったが、他児がヴァイオリンに触れる様子を見つめた。

事前アンケートの回答結果（表2）によって明らかとなっているように、今回参加した4名の子どもは自宅にヴァイオリンを所有していない。子どもたちにとって、ヴァイオリンは初めて目にするもの、もしくは普段あまり見ることのない珍しい楽器であり、自身の手で触れるのは初めての経験だったに違いない。指導者がヴァイオリンを取り出し、弦を指で弾いて音を出す様子を見せると子どもたちは一斉に注目した。その後、順にヴァイオリンに触っていったが、実際にヴァイオリンに触れた3名はそれぞれ、指導者や他児とは異なる方法でヴァイオリンに触れている。またB児はワークショップの間中、ほとんどの時間を母親に抱かれた状態でいたため、この活動でもヴァイオリンに触れることはしていない。しかしヴァイオリンの音が聞こえると、母親の膝から降りて立ち上がり、母親の肩に片手を置いて他児がヴァイオリンに触れる様子を見つめた。

この活動の最中には、子ども同士の関わりの中で集団による順守が見られたことにも注目したい。指導者の「触ってみる？」の声掛けに、D児の母親がD児の手を挙げさせたため、指導者は最初にD児のもとへヴァイオリンを持って行った。その際、A児とC児がすかさずその場

に走り寄ったが、「順番、順番」というA児の母親の制止があったことによって、2人はD児がヴァイオリンに触れる様子をすぐ横で見つめた。実際にワークショップ開始前には、動物を模った小道具をA児とC児が引っ張って取りあう姿があったが、この場面では母親の声掛けによって自己をコントロールすることができている。

### 事例3：絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせ

C児の母親による絵本の読み聞かせに合わせて、指導者がピアノの即興演奏を行った。C児は落ち着きなく動き回っていたが、A児、B児、D児は概ね集中して読み聞かせを聞いた。途中で気が散ったり退屈したりする様子も見られたが、ピアノで奏される効果音によって再び絵本に意識を戻す姿が見られた。

C児の母親にご協力いただき、絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせを行った。C児の母親が絵本を読み、指導者が絵本の進行に沿うように、登場する人や動物をイメージさせるような効果音、物語の雰囲気にあった背景音楽をピアノによる即興演奏でつけていった。子どもたちはそれぞれ、母親と一緒に絵本とピアノを囲むようにして座った。A児は口におしゃぶりを付けた状態であったが、視線を絵本に向けた状態で熱心に聞き入っていた。ピアノが大きな音を奏する場面では、何度かピアノの方に視線を動かしたが、最後まで身動きせずに集中している様子を見せた。B児は途中から手に持ったぶどうの小道具で遊び始めたが、そうした間も視線は絵本やピアノに向けられていて、常に活動を意識している様子であった。C児は母親が読み聞かせの役割を担っていたため、1人で落ち着きなく動き回ったり寝転がったりしていたが、途中でB児に近寄り、B児が持っていたぶどうの小道具について話し掛ける姿があった。D児も途中、手に持っていた魚の小道具を使って手で遊んだり、母親の膝に寝そべったりして退屈したような様子を見せたが、ピアノの音が大きくなると驚いたように座り直し、再びピアノに目を向けた。

「おおきなかぶ」はロシアの昔話である。今回は福音館書店から出版されている絵本を用いたが、「読んであげるなら3才から」と記されているとおり、1・2歳児にとってはやや長く、難しい。またワークショップ終盤ということもあり、子どもたちに疲れが見え始めたことに加え、それまでの活動で使用したぶどうや魚の小道具が手元にあったことによって絵本以外のものに気を取られてしまうような様子があった。しかし、図2に掲載した譜例のように、「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声に合わせてダイナミクスの大きい効果音が聞こえる場面等では、改めて絵本やピアノに注目する姿が見られた。



図2 「うんとこしょ、どっこいしょ」に合わせた効果音の例

## 6. 考察

実施後アンケートの回答結果及び先に挙げた3つの事例をもとに、4名の未就園児が音楽遊びに取り組む姿を考察していく。考察は4名の年齢と発達段階を考慮し、『保育所保育指針』

に示されている1歳以上3歳未満児の領域「表現」における3つのねらいに鑑みて行う。

- ① 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう (以下、【ねらい①】)
- ② 感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする (以下、【ねらい②】)
- ③ 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる (以下、【ねらい③】)

### (1) 実施後アンケート

実施後アンケートの設問①「子どもが興味を持った活動」についての回答からは、子どもの年齢や発達段階によって、興味を持って取り組んだ活動が異なるという結果が得られた(表4-1)。1歳児が興味を持った活動は、②歌を歌う、③楽器の音を聞いたり楽器に触れたりする、⑧即興演奏付きの絵本の読み聞かせを聞くであり、指導者が行う音楽遊びを見たり聞いたりする等、いずれも指導者の主導のもとで行われた活動である。それに対して2歳児は、④、⑤楽器の音を聞いて目標物を取りにいく、⑥動物の絵や写真を見て、鳴く真似をする等、指導者の提示する音や物をきっかけとして主体的に動くことができるような活動に興味を持っている。このことから、1歳児は指導者が行う音楽遊びを見聞きすること自体を楽しんだが、2歳児は自由に動き回ることができ、既にある知識を自身で表現することができるような活動に興味を持ったのではないかと推察する。2歳児に見られた主体的な活動に対する好奇心は、【ねらい②】への繋がりを窺わせるものである。さらに④、⑤の活動は、見たり聞いたりするだけでなく、自身の手にとって触るという感覚を併せて使うものであり、【ねらい①】への関連を指摘することができるであろう。また、設問③「帰宅後の子どもの言動に『タビする音楽教室』の影響と思われるようなものがあつたか」の回答からは、音楽に合わせて踊ったり動物の鳴き真似をしたりする等、4名中3名に何らかの影響が見られたことが明らかとなっている。ワークショップにおける音楽遊びの経験が、その後の音楽的な機会において活かされた可能性を指摘できるものであり、【ねらい③】に向かう姿であると期待したい。

### (2) 3つの事例

今回のワークショップでは、表現方法や自由度は様々であったものの、子どもが音や楽器に興味を示し、音楽遊びを通じて「自分なり」に表現する姿が見られたことを強調したい。先に挙げた3つの事例に表れているように、子どもたちは音や音楽、楽器に対して敏感に反応した。積極的に参加していた子どもだけでなく、母親から離れることができなかつた子どもも、楽器の音や音楽が聞こえると瞬時にその方向に目を向け、耳を傾ける様子が見られた。そして、音楽遊びを通して引き出された表現は、他児の姿や動きに影響されたものではない、自らの好奇心に刺激されたものであったと言える。

事例1では、子どもたちの視線はピアノに向けられていて、他児が歌に合わせて手を打ち合わせたり踊ったりする姿には向けられていない。また事例2では、指導者や他児がヴァイオリンに触れる様子を間近に見ていても、その模倣ではない異なる方法でそれぞれ楽器に触れている。1・2歳児はまだ幼く、他児の様子を窺いながら動く姿はあまり見られなかつたが、だからこそ、自身の欲求のままに動き回り、心の動きを表出することができたのではないかと考えられる。このように、指導者や他児の模倣でなく、自ら考え、思うように表現する姿からは【ねらい②】が達成されたとと言えるであろう。

事例3では、絵本以外のものに気を取られたり、退屈したりした子どもたちが、ピアノ演奏によって再び絵本の読み聞かせに引き込まれる様子が見られた。絵本の進行に合わせた即興演

奏は、次々と登場してくる人や動物にはそれぞれをイメージさせるような効果音が、何度も繰り返される「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声の部分には、音域や音量で変化を加えた同一のモチーフによる効果音(図2)がつけられていた。特に、「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声と共に大きな動きが見られる場面では、ダイナミクスの大きい効果音に驚いた様子で絵本やピアノに注目する姿が顕著に見られた。子どもたちは、目で絵本を見ながら耳で音楽を聞くことで、登場する人や動物、場面のイメージが広がっていくような感覚を味わったのではないかと推察されるため、この経験は【ねらい③】に繋がる要素を含んでいると考えられる。また、実施後アンケートの設問②の回答結果(表4-2)にもあるように、「保護者が子どもに経験させたいと考える活動」として、4名全員の保護者がこの活動を選択している。ワークショップ参加の目的が「子どもに音楽的な経験をさせる」であったことは事前アンケートの項で述べたが、この活動は保護者にとっても満足度の高い内容であったと言える。ワークショップ後の歓談の中でも、「絵本の読み聞かせはピアノの生演奏付きで、図書館等での読み聞かせでは経験できないことなので、とても良かったです」という意見が得られたことを挙げておく。

今回行われた音楽遊びは、子どもの「聞く」、「見る」、「触る」感覚を活かした活動が多く取り入れられていた。中でも事例2のような触覚を使った活動は、子どもの好奇心を強く刺激し、自由な表現を引き出したと言える。さらに事例3では、B児とD児の2名が他の活動に使用した小道具をずっと手にしている姿が見られた。こうしたことから、【ねらい①】への関連が充分に見受けられると言えるであろう。そして、楽器や小道具をめぐって子ども同士のコミュニケーションがあったことから、実際に触れるという経験は、子どもの自由な表現を引き出すだけでなく、人や社会との繋がりが生まれる可能性を示唆するものであると考える。

今回のワークショップでは、子どもたちが「自分なり」に表現する姿が見られた反面、他児の動きを真似たり、他児の表現に触発されたりすることによって、新しい表現が生まれるという効果は得られなかった。しかし、大場らは子ども同士の相互作用について、「お互いに引き合うものがあって、集まること自体が楽しく感じられることがある」と述べ、共に遊びを展開するだけでなく、一緒にいること自体を楽しむという経験の重要性について提言している<sup>14)</sup>。実際、一緒に過ごす時間が経過すると共に、活動内容によって子ども同士の関わり方は変化している。ワークショップの冒頭に行った活動1では、他児の姿に目を向ける子どもがいなかったのに対して、活動2では他児の様子をじっと見つめる姿があった。さらに活動を進める中で、母親の声掛け等によって、順番を待つ、物を貸すといった集団のルールを経験したり、子ども同士が徐々にコミュニケーションを取ったりする場面が生まれた。このことから、音楽遊びによる領域「人間関係」への関連も指摘することができるであろう。特にねらいの1つである「周囲の子ども等への興味や関心が高まり、関わりをもととする」は、今回のワークショップにおいても子ども同士のやり取りを通して見られた姿であると言える。子ども同士が関わり合う中で、他児の表現に刺激を受けたり一緒に表現したりする等、子どもたちの表現がより豊かに広がっていくような音楽遊びの在り方については今後、一考の余地があるであろう。

また前述したように、ワークショップに参加した子どもの年齢は1歳6か月から2歳8か月までと、やや開きがあったのではないかと考える。指導者はその年齢幅を踏まえた上で活動内容を考え、実践に臨んだ。結果として、年齢や発達段階における知識・技能の差異だけでなく、その場に適應する能力等によっても子どもの動きや表現が制限されていたように思う。初めての環境にも臆することなく、好奇心の赴くまま自由に動き回ることができる子どもがいる一方

で、母親から離れて活動することが難しい子どももいた。また、それぞれの子どもと母親の関わり方にも影響を受けたと言える。子どもの自発的な表現を引き出すためには、子どもの様子を注意深く見つめ、その反応を受けとめる必要がある。しかし、ワークショップの最中には、母親が子どもを立たせたり前に出るように促したりするような姿や、子どもの手を取って手拍子を打たせたり、体を揺らしてリズムに乗せたりする様子が随所で見られた。母親の取るリズムや体の揺れによって、子どもが音楽を享受していることも十分に考えられるが、無理矢理活動に参加させようとしたり、子どもの表現を遮って手拍子を打たせたりする等、子どもの表現する意欲を削いでしまうことが考えられるような場面があったことは否定できない。今後、特に1歳児を対象とする場合には、母親と共に参加することを想定し、母親と一体となって表現することができるような活動内容を考えることも必要であろう。

## 7. 結語

本論では、音楽遊びのワークショップに参加した未就園児4名の姿を観察し、アンケート調査の結果と併せて考察した。そして、『保育所保育指針』に示されている1歳以上3歳未満児の領域「表現」における3つのねらいがどの程度達成されるかを明らかにし、音楽遊びの可能性について検討を行った。

音楽遊びを通して、1歳児や2歳児といった低年齢で未就園の子どもであっても、音楽や楽器に対して大いに関心を持ち、好奇心に刺激されて自由に表現する姿を見ることができた。その動きは、子ども自身の積極性や発達段階によって異なる。しかし、音楽遊びを通じて見られた表現は、自分の感じたことや考えたことを表現するというにとどまらず、他者に影響されない「自分なり」の自由な表現であることが3つの事例によって示された。今回参加した子どもに他児の模倣は全く見られず、そこから新しい表現への展開は行われなかったが、保護者の声掛け等によって生まれた子ども同士のやり取りからは、社会性の片鱗も垣間見ることができた。

本論で考察を行ったように、『保育所保育指針』に示されている1歳以上3歳未満児の領域「表現」におけるねらいは、未就園の子どもでも十分に達成できる見通しの立つものである。今後、『幼稚園教育要領』をはじめとする3法令において示された3つのねらい<sup>15)</sup>の達成に向かって、より学びを深めていくことが期待できるであろう。また、音楽遊びからは他の領域への関連も指摘することができ、相互的に育まれていく展望を見出すことができた。しかし、保育所や認定こども園に通っている子どもに比べて、未就園児は子ども同士で関わる機会が少ないと言わざるを得ない。他児の表現からさらにイメージを膨らませ、他児と一緒に表現することによって生まれる一体感を味わうような経験をすることは、子どもの豊かな表現を育むだけでなく、人や社会との関わりに繋がっていくと考える。今後、音楽遊びをきっかけとして他児との関わりが広がり、コミュニケーションからさらに発展した表現が引き出されるような活動内容や指導法について検討していきたい。

## 謝 辞

本研究にご協力くださった高村衣美璃氏、子どもと保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

## 脚 注

- 1) 「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」
- 2) 「1. 健康な心と体」「2. 自立心」「3. 協同性」「4. 道徳性・規範意識の芽生え」「5. 社会生活との関わり」「6. 思考力の芽生え」「7. 自然との関わり・生命尊重」「8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「9. 言葉による伝え合い」「10. 豊かな感性と表現」
- 3) 鶴間他（2009）を参照。
- 4) 塩路他（2018）を参照。
- 5) 本稿にて後に掲載する。
- 6) 厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ（平成29年4月1日）」の「年齢区分別の保育所等利用児童の割合（保育所等利用率）」を参照。
- 7) 『日本子ども資料年鑑』（2018）に平成23年から29年までの「年齢区分別、保育所利用児童数と割合の推移」が掲載されている。
- 8) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「認可外保育施設・幼稚園預かり保育の現状について」の「保育園と幼稚園の年齢別利用者数及び割合」を参照。
- 9) 厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ（平成29年4月1日）」の「年齢区分別の利用児童数・待機児童数」を参照。また、平成29年10月時点における保育園の待機児童数の状況についても公表されているが、参考値とされているため本研究では扱わない。
- 10) 厚生労働省「『子育て安心プラン』について」を参照。
- 11) 高村衣美璃氏が「音を身近に感じられるような、体験型移動式音楽教室」として企画・運営する音楽教室。高村氏は開催目的について、「フランスの音楽院システム【*éveil musicale*（音楽の目覚め）】を参考にして、子どもが遊びながら音楽に興味を持つ機会を作りたい」と述べている。
- 12) 高村衣美璃氏（ピアニスト）：Conservatoire Pierrefitte-sûr-Seine（ピエールフィット音楽院伴奏員）
- 13) 幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園は全て日本の幼児教育施設として位置付けられている。C児は週に2日、託児所に通っているが、託児所は幼児教育施設には含まれていないため、本研究では未就園児とみなす。
- 14) 大場他（2005）11ページより引用。
- 15) 『幼稚園教育要領』のねらい及び内容、『保育所保育指針』の3歳以上児の保育に関するねらい及び内容、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容は共通のものが記載されている。領域「表現」におけるねらいは以下のとおりである。「1. いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」「2. 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」「3. 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」

## 引用文献

大場牧夫・大場幸夫・民秋言（2005）『新保育内容シリーズ〈改訂〉子どもと人間関係』、萌文書林、10-11.

### 参考文献

- A. トルストイ (1966) 『おおきなかぶ』, 福音館書店.
- 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』, フレーベル館.
- 厚生労働省 「保育所等関連状況取りまとめ (平成29年4月1日)」  
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000176121.pdf> 最終アクセス2018年9月14日
- 厚生労働省 「『子育て安心プラン』について」 [https://www.kantei.go.jp/jp/singi/syakaihosyou\\_kaikaku/dai7/shiryu7.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/syakaihosyou_kaikaku/dai7/shiryu7.pdf) 最終アクセス2018年9月14日
- 塩路晶子・木村直子 (2018) 「幼稚園における未就園児の保育内容に関する一考察」, 『鳴門教育大学研究紀要』, 第33巻, 24-34.
- 社会福祉法人恩賜財団 母子愛育会 愛育研究所 (2018) 『日本子ども資料年鑑』, KTC中央出版, 280.
- 鶴間順子・杉山弘子 (2009) 「遊びうたについての一考察 —未就園児の遊びの会での事例を通して—」, 『尚絅学院大学紀要』, 第57号, 109-117.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』, フレーベル館.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 「認可外保育施設・幼稚園預かり保育の現状について」 [www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo.../dail/siryu3.pdf](http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo.../dail/siryu3.pdf) 最終アクセス2018年9月14日
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館.